

研究ノート

日本文化と対人関係  
— 巧妙さと曖昧さ —

Interpersonal Relations in Japanese Culture  
- A Special Technique to use Ambiguity and Indirect Communication -

酒木 保\*)  
Tamotsu Sakaki

**要旨**：日本人の対人関係の構造を、「うち」と「そと」、「うら」とおもて、「ほんね」と「たてまえ」の語句を用いて、説明したものであり、その機能がメビウスの帯のような特性を持つことを論証した。

**Key Words**：日本文化 対人関係 メビウスの帯

我々は日常の生活において、しばしば物事に対する取り組みや、それに付随する対人対応において、得手と不得手とがあります。

例えば、見知らぬ人との接触が苦手な者が、見知らぬ人の集団の中に入れられて、集団構成員と対応することを要求されたとき、その人にとってその状況は脅威であり、とても緊張するでしょう。そしてその場の状況を回避するためには、出来る限りその場での人との対応を避ける行動にすることで自分を守ると思われます。

しかし自分が見知らぬ相手との関係が苦手であり、すぐに緊張してしまうことをまわりに露にして、開き直ってしまうとこれまでの緊張が一瞬にして弛緩し、なぜか滑らかに話すことが出来るようになって、時には話しすぎるほど話してしまうこともあるでしょう。これらのことは、いずれも日常生活において多くの人が体験する極有りふれた事ではないでしょうか。つまり、前者の私は内にこもって「わたし」をまもり、後者の「わたし」は外に出て開き直る「わたし」をそれぞれ表しており、わたしには常にふたつの側面を持つことが解ると思いません。

このふたつの「わたし」が程良く調和して在るのが、内と外とを程良く結び付けていくようです。

そして、この調和を逸した場合に個別的には生きて行くのが不都合になる様々な事態に直面するようにおもわれます。

つまり、「わたし」が内にこもりすぎたり、「わたし」が必要以上に外に出すぎたりすると、日常生活において生きていくことが困難になる事態を招く可能性を高くするように思われます。

内にこもる「わたし」は自己の主体性を過剰に統制し、他者との対峙をことごとく避ける行為にでるのです。これとは逆に外にでる「わたし」は主体性の統制が困難となり、ことごとく他者とぶつかってしまいます。

また、内の「わたし」と外の「わたし」とがあまりにも異なる構造を持つとき、両者の間で強い葛藤が起きることになります。

しかし、内にこもる「わたし」と外にでる「わたし」とは表裏の関係にあり、それらは日本文化と密接に関わっているのです。

これより、日本文化とそれぞれの「わたし」について論述していきます。

日本文化と対人関係

ここでは日本文化と密接に関係する、対人関係の

\*) 宇部フロンティア大学人間社会学部福祉心理学科教授

あり方である内と外について説明したいと思えます。日本人の対人関係の構造は多層的です。

多くの日本人は、自分自身を他者に向けて紹介をするとき、自分の持つ個人の資格よりも、自分の所属している集団名を前面に出すのが通例のようです。

初めて出会った人に自己紹介をする場合、自分の所属する学校や会社の名称を表に出して、その集団に自分を位置づけているのが良く解るでしょう。このようにして、必ず自分の所属を表に出して、個人の資格や役割は後ろに付け足す程度にして自分を紹介するのです。

そこでは、集団に所属することによって、自分の社会的地位や役割を、あるいは権威を得ようとする心理が働くようです。そして、自分の所属する学校を「うちの学校」と呼び、あいてのそれを、「おたくの学校」あるいは「わたし」の学校と区別するために「よその学校」というように呼びます。

このように、物事に対して一線をやたらと引きたがり内と外とを分けようとするのは日本の文化と密接な関係があります。これらの線引きは特に対人関係において、如実に現れます。そこでは同じ集団に属する人を内の人とし、他の集団に属する人を外の人として区別しています。このようにして引かれた線は外から内に越えるにしても、内から外に越えるにしてもなかなか困難なことです。

線の外から線の内を覗いて見ようすると、「これは内輪のことだから」と言って、外からの関与が極度に嫌われることがあります。このように外からの関与を極度に嫌う時は、そこで触れられる内容が、ほとんどの場合内側の人にとっては好ましくないことが含まれているときでしょう。どうやら我々は好ましいと思われる内容のものは外に出し、好ましくない内容のものは、内に仕舞っておこうとするようです。表向きと裏向きはこのような物事の価値判断から生まれてきたようです。

表と裏が対になって表現されるのは、日本語の特徴でもあるのです。表と言えば裏が、裏と言えば表が必ず付いてまわってきます。例えば、表通りに裏通り、表書きに裏書き、表地に裏地など少し考えてみれば次々浮かんでくるでしょう。

しかもそれが直接対になっていなくても、必ず対概念として表は裏と、裏は表と結びついているのです。例えば、表をたてるといえば裏はどうなっているのかと勘ぐることになります。また、表を繕うといえば、裏は破れていることが想定されます。

すなわち、表は見えるものだから整えなければな

らないが、裏は見えないものだからそのまま隠しておこうと言うことになるのです。

しかし、我々は裏を見せずに裏を読みとらせたり、裏を見なくても裏を読みとるのが得意です。それが例え肯定的な言葉で語られたとしても、ちょっとしたイントネーションで実は否定的であることを読みとったり、逆に読みとらせたりするのに長けています。

ここでは裏が表を演出し、表が裏を演出しているのであり、このような在り方が日本文化を背景にもった、人間関係のあり方なのでしょう。

そして、これが実は心と顔の関係でもあります。つまり、裏が心で表が顔なのです。うら悲しい、うら寂しいのは、いずれも心がかなしいのであり、また寂しいのです。

さらに、心の作用である感情の起伏や心の中を、体の一部である臓腑で表すのも日本語に多くみられる表現です。例えば、腹が立つ、臓腑が煮え返る、断腸の思い、などいずれも腹に纏わることです。

これらが腹におさまっている場合はよいでしょう。しかし、腹におさまらなくなると、胃とか腸に疾患が生じてくるようです。このようにして生じる疾患を、心身症というのです。腹と心との関係がここでは如実に物語られているのです。

一方、表は面であり、これは顔を表します。面を上げるは顔を上げることであり、面置くは顔を向けることです。視線恐怖症は顔にまつわる病理であり、これに該当する外国語がないので日本文化と関係の深い対人恐怖症のあり方であると言われていきます。

視線恐怖症には見られる不安と見てしまう不安とがあります。いずれも外との関係を意識し過ぎる状態です。これらのことから、心身症と視線恐怖症とは、裏と表の病理であり、いずれも日本文化と強いつながりがあるように思われます。

こうして考えてみると、腹に治め過ぎないこと、周りを過剰に意識し過ぎないことが、上手に日本文化に適応していくことにつながるようです。どうやら裏と表を使い分けていくことが、日本人の対人関係を上手に保つためのコツであるように思われます。結局のところはその時々状況に応じて、いつの間にか裏が表になったり、表が裏になったりしていることになり、つまるところ裏も表も互いにつながりが在り、同じフィールドにあるのだといえるでしょう。日常においても肯定が否定になったり、否定が肯定になったりするのは、頻繁に見受けられることです。つまり、メビウスの帯的コミュ

ニケーションと言えるでしょう。

しかし、このメビウスの帯が切れたり、途中で帯の上で止まったりすると、一つの方向に頑なに固着しようとし、そこから対人関係に纏わる様々な無理が出てきてストレスになり、いろんな症状を出すようになるのです。大切なのは、この両者を状況に応じて適度に使い分けたり、あるいはうまく統合化する工夫を試みたりする柔軟な在りかただと思われまます。この手の達人は、随分多いものです。

そして、おそらくそこから本音と建前が生まれたのでしょう。この本音と建前とをうまく使い分けていくのが、日本文化での上手な生き方ではないかと思ひます。

本音と建前とを上手に使い分ける柔軟な心を養うことが、大人に成ることだと思われのですが、これがなかなか難しいのです。

学校では勉強は教えてもらえるのですが、社会の

中でどの様に生きて行くのが良いかは教えてもらえません。生きていくにあたって混乱をもたらさないための教育も、ぼつぼつ本格的に考えて行かなければならない時期に来ているのです。本音は建前につながり、建前は本音につながっています。

つまり、「わたし」が「わたし」として十分に機能していくには、内にこもることも、外に出ることも、ほどほどに必要です。どうやらこのほど良さが身につかないときに、様々な支障が生じるようです。これらのことを空間論的に論証すれば、いかにメビウスの帯的關係であるかが、明らかになります。

ここに報告した小論は「わたし」をみる・「わたし」をつくる 今川民雄 編著 に掲載した「わたし」がみえなくなる の一部を加筆修正したものである。